

末黒野

すぐろの

4月号 (通巻788号)



日脚伸ぶ

小川玉泉

冬萌を啄む雀みな小振り
千両を活けて帰る子小晦日
年の夜の耳底ゆすり消防車
曾孫の来て伝ひ歩きぬお元日

母の忌や葉数ふえたる仏の座
三度鳴くこと繰返し寒鴉
寒鴉騒ぐと見れば地震来たる
足裏を攻むる底冷え朝厨
風花に話の途切れ御用聞き
磯伝ふ足おぼつかな寒落暉
百の芽を育む椿日脚伸ぶ
橋くぐる潮の香りや日脚伸ぶ

幣 辛 夷

松本三千夫

寺に遺る縁切文書凍てふかく
臘梅の溶けんばかりや俯きて
一羽去り二羽来風樹の寒雀
海を見にたどる近道冬堇
樹に凭ればわれも枯野のものとなる
冬萌や道は炭焼小屋に尽き
探梅や小振りの茶房灯をともし
江の島へ寒灯続き海平ら
灯届かぬ厨の隅の寒さかな
一番星枯野奥行き失ひて
冬芽びつしり子授寺の幣辛夷
鳶の輪の大きくて春遠からじ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

初 鴉

清海信子

返り花鮮やかなるを哀れとも
せめてもの贅とし日々の柚子湯かな
忘年や風に押さるる川の音
着ぶくれの影がしみつく築地塀
極月や岬の湖ははがねの香
暁紅に染まりて二羽の初鴉
二日はや自転車磨く親子かな
野の隅の名もなき神も松迎へ
湯豆腐に深谷の葱の色加ふ
冬麗や齒朶群落に日の雫

初 雀

黒滝志麻子



池に影映して山の眠るかな
御僧の脛みな細し煤払
年の市風がうがうと城の空
枯すすき風のかたちに残りをり
馬事公苑蹄鉄を打つ音冴えて
竹垣を透きて朝日や竜の玉
天神の日向をとんで初雀
先がけの笛に鳩たつ初神楽
潮風に吹かれて畦の寒菹
お年玉福沢諭吉と子の電話

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

初景色

西川 みほ

晩年を急かず温めの冬至風呂
大年を掛流したる旅の出湯
着ぶくれて足湯に憩ふ道の駅
ちらちらと傘寿の覗き初鏡
眼間に伊豆七島や初景色
初旅や浜に絆の文字書きぬ
手料理を持ち寄り寡婦の女正月

晩冬

松田 泰子

花石路やすこし欠けたる壺の口
枯蓮の倒れきつたる安堵かな
遠景の中の冬帽あるきだす
寒椿さきがけの紅点じけり
行く年の黒き大きな船泊つる
冬雲に置き去られたる昼の月
すこし土踏みて三日の暮れにけり



初詣 森清 堯

笹鳴きに息をととのへ寺の磴
翡翠の期する一閃蘆枯るる
爪切りを手に加はりぬ日向ぼこ
数へ日のひと日予約の取り消さる
段差なくととのへられて初詣
合同句集銀の背文字の淑気かな
馬場跡に鳥影走り冬堇

クラクシヨン 森清 信子

フアスナーを顎まで上げて年の市
手袋に握手のぬくみ収めけり
初富士やお薄を点つる母卒寿
クラクシヨンは隣り家なりし春着の子
挽き立ての朝の珈琲早四日
寒晴や海に構へる朱の鳥居
山頂の百体地藏冬日和

小寒 吉田きみえ

木の橋の残り捨て田の冬紅葉
街並を見下ろす丘や冬灯
雪催針を数えて仕舞ひけり
光満つ社冬芽の櫓櫓
友見舞ふ小寒の日の和らげり
釣人の池のさざ波寒半ば
雪止みて風の日暮れとなりけり

底冷え 安斎久英

身を斜に餌を捉へたり冬かもめ
天変地異無き事切に初日影
墨痕の穂先の氣負ふ吉書かな
千枚の棚田極むや冬の雲
底冷えの闇引き行けり修行僧
野水仙暮れて波音ばかりかな
確かなる冬芽丈余の辛夷かな

青炎集

横浜 秋山 梯歩

献血車かたへに控へ年の市
昏れ残る路地の一灯飾壳
割烹着妻に着せらる煤払
一滴の神酒を火口へ窯始
初鳩の群舞に翳り神楽殿
微塵なき玻璃にあまねき初茜

横浜 山崎 稔子

落葉搔き母子にそそぐ日の優し
愚かさを脱む仁王や年の暮
寒杙の再び戻り仕舞風呂
雲抜くる希望の光初日の出
薄ら日や葉の動かざる青木の実
冬ざくら級友よりの文届き

小川玉泉選

横浜 小山 直子

空の星聖樹の星と光り合ふ
予後の良き夫の背ながす初湯かな
人声に鴨動き出づ神の池
餅花の賑やかにゆれしるこ店
着ぶくれて話上手の聞き上手
石路咲くや光蔭といふ早きもの

横浜 倉橋 千代子

極月の予期せぬ事は先送り
注連潜る湧水勢ひ初光り
逃げ易き日差しを捉へ竜の玉
あと少しぬるき湯たんぼ引き寄せて
湯たんぼの捨て湯分け合ひ顔洗ふ
落葉敷く銀杏並木の道明り



横 浜 浅 川 幸 代

日溜りへこぼるる如く寒雀
寒鯉や水の重さをゆらしをり
オリオンに近づく磴や除夜詣
初空の青にそまらず鳶一羽
口紅をかるくさしおく松の内
新雪をこぼし高速バス止る

横 浜 今 泉 あ さ 子

年の瀬の魁となる魚市場
振舞ひの鮫鱈汁や腹に沁む
道路工夫の光るベストや年詰る
スーパールの入口占めて飾売
解体の決まりし家と年送くる
命毛のはしるひらがな筆始

横 浜 太 田 良 一

帰郷せぬ子の名を書けり祝箸
食積や絆創膏の母の指
鎌倉や猫ふところの初詣
銭洗う挟気にして春着の子
職退きて除夜の鐘待ち仕舞風呂
窓開けて一打待ちけり除夜の鐘

横 浜 三 橋 玲 子

ふるさとの畑つ物もて年用意
畳なはる嶺嶺くろぐろと年暮るる
遠近の鐘の音の沁む年の夜
序破急の調べ昂る初鼓
ちりめんのお手玉五つ針起し
窓ごしの寒星ひとつ流れけり

横 浜 有 賀 鈴 乃

明日嫁ぐ子と見上ぐるや冬銀河
駅前のビルを彩どり聖樹の灯
独り居のあしたに掛ける新暦
朱の橋と平橋続く淑気かな
琴の音の流るる寺苑初詣
灯を点す老舗鮎屋の松飾

横 浜 堀 畑 朋 子

日記買ひ平穏な日々願ひけり
近況を元氣と添へて賀状書く
小さき子の順に渡すやお年玉
年明けや馴染の肉屋閉店に
朝遅き夫に合せて根深汁
大寒や脹雀は藪の中

耕 土 集

松本三千夫選



江ノ電の富士道連れに初詣

横浜 小林 和世

湯豆腐の湯気の向かうの倅かな

泣初の声響かせる里帰り

骨董に光満ちたる二日かな

丸き背のますます丸く寒に入る

伸びやかに正午の汽笛枯木道
父と子の慣れぬエプロン掃納
手の反りて子供獅子舞よく跳ぬる
多羅葉に願ひを記し福詣
華やぐや産子目見えの春の札
横浜 和泉 道草

百人が百様に撞く除夜の鐘

布施由岐子

初春やなで肩の富士麗しき

黒豆に草石蚕の紅を添えしこと

連獅子の子の勢ひや初芝居

赤き実の初荷と見えて棚筏

買初やモンブランてふ極太ペン
古民家の茅葺き新た初日の出
歌留多読むふしはおのづと母のふし
田の中のどんどの吉書天に舞ひ
埋火の包めど芯はたけりをり
石井 勇

縫初の指先すこし鈍りけり

芝田 幸恵

最後まで残るは大根膾かな

負ふた子に教へられをり冬の梅

生も死も受話器よりくる霜夜かな

噓して待針拾ふ豊かな

初氷思ひのほかの厚さかな
柝^きを打てば星の瞬く夜番かな
境内の修業中てふ猿回し
掃き散らす魔女の箒や冬の空
底冷や節電なほも継続中
日野 中村 月代

紫苑

森清

堯

簞の奥より透る初音かな
ふところ到大薨見せ山笑ふ
山頂に暈の日を上げ梨の花
揺れ止んで色深うせり藤の房
蟹の家に迫る段畑金盞花
ゆりの木の薄ら日捉へ花を上ぐ
植田風がたりと貨車の動き出で
葎切の葎撓ませてひとしきり
獅子頭脱ぎしは乙女髪ほどく
大池に翡翠一閃初明り

良 夜 嵐 弥 生

鳶の笛頻りに降りぬ島の春
風光る明治を遺す長屋門
春耕や老爺操つるトラクタ
遠雷や常に遅延のバスを待つ
遠近に頻る老鶯谷戸の里
折り折りの風の恵みや夕端居
不揃の胡瓜もまじり荷の届く
江戸川や渡舟を掠め鰯はぬる
久々の子と時過ごす良夜かな
厨ごとと済ませ居待の月仰ぐ

努力賞受賞作品抄

春の土

大川暉美

礁 打 つ 波 の 尖 り て 春 寒 し
緩 き 歩 に 合 は す 歩 幅 や 黄 水 仙
鋤 入 れ て 十 指 の ほ ぐ す 春 の 土
燕 来 る 峡 の 一 戸 の 深 廂
鯉 幟 泳 ぐ 旧 家 や 風 新 た
観 音 の 影 や は ら か き 樟 若 葉
姥 捨 の 青 田 百 枚 風 の 中
菜 園 の 恵 み 豊 か や 茄 子 の 馬
秋 彼 岸 線 香 香 る 矢 倉 墓
リ フ ト よ り 富 士 を 遠 見 に 秋 澄 め り

努力賞受賞作品抄

水木の花

岡本ヨシエ

受 験 子 の 砂 浜 に 書 く 希 望 の 希
鳩 笛 の 山 に 飴 し 風 光 る
初 島 へ 鷗 つ き く る 春 の 海
昼 の 鐘 鳴 り 渡 り た り 島 の 春
坂 道 の 島 の つ ら つ ら 椿 か な
山 道 に 赤 を 敷 き 詰 め 落 椿
山 里 や 四 方 に 水 木 の 花 極 む
曇 天 の 池 を 明 る く 半 夏 生 草
潮 の 香 の 路 地 裏 涼 し 漁 師 町
街 路 樹 に 提 灯 の こ り 祭 果 つ

努力賞受賞作品抄

樟 若 葉

加藤八重子

平 凡 な 年 を 願 ふ や 福 は 内
書 く 文 字 の 直 ぐ に 浮 ば ず 名 草 の 芽
春 愁 ひ 遠 出 も 出 来 ず 地 図 を 見 る
二 歳 児 の 知 恵 の 日 毎 に 夏 帽 子
跳 ね 上 り 池 面 を 叩 く 錦 鯉
樟 若 葉 生 き 抜 く 事 を 学 び を り
入 れ 替 は り 鏡 に 写 す 夏 帽 子
望 郷 の 念 捨 て き れ ず 月 今 宵
言 ひ た き を 忍 の 一 字 や ち ち ろ 鳴 く
過 去 な べ て 些 事 と 思 へ り 破 芭 蕉

蓬摘む

原 和 三

青き踏む少年に翳なかりけり
啓蟄や遠出の妻の旅仕度
耕人を遠く農の血さわぎをり
日にまみれ土のにほひの蓬摘む
青空をはやも掃きをり今年竹
路地越しのスカイツリーや額の花
父の日やつひに携帯持たさるる
峰雲や北の大地の風車群
ゆるゆると礼文の夏の没日かな
売り声の絶えたる路地や釣忍

思ひ草

山崎稔子

乾きたる苔の古木や梅三分
早春やレンズに狙ふ鷺一羽
唐破風の門に駆け込み春時雨
日のにほひ風のにほひや新樹光
大椰子の梢を煽りて大南風
真昼間の池を狭しとあめんばう
気まぐれに鳴る風鈴を友とせり
てふてふと幼の指せる大花火
朝挽ぎの秋茄子並べほまち店
里山の繁みの蔭や思ひ草

秋惜しむ

岡井マスミ

蒸籠 噴く 春まだ 浅き 六区 かな
身の 内に 地震の 揺れあと 山霞 む
鳥の 来て 椿に 溺る 無人 駅
花未だし 樹下に 昼餉の 一家 族
総持寺や 胸に 押し 行く 若葉 風
青蘆の 中より 湧けり 堰の 音
町史展 あぢさゐ 壺に 溢れ させ
で 虫を 葉に 返し やる 園 出口
木華を 挽ぎ て 童に 還り けり
白萩は 樋の 高さ に 子規 旧居

引く波

神谷さうび

立春の窓開け放ち深呼吸
梅東風や波の残せしうつせ貝
衣擦れの音の追ひこし針供養
太陽を水面に置きて蝌蚪の国
のどけしや往き来自在の関所跡
引く波のくすぐる足裏夏隣
席譲る少年の目の涼しさよ
風涼し土鈴の音を聞きくらべ
炎帝にひれ伏すさまや磯馴松
父祖の地や風は海より施餓鬼幡

山 藤

上月智子

早咲きの梅や賽銭五十円
菜の花や朝日に両手合はす人
肌で聴くロックギターや月朧
山藤や小さきバスの折返し
茶所に茶を求めけり麦の秋
末吉の吉も吉なり額の花
隠せるも二の腕太し夏衣
平らかな水田に零れえごの花
階の崩るるままや苔清水
現へと返り滝見の昇降機

新人賞受賞作品抄

風薫る

美田茂子

菜の花や心ゆくまで日を浴びて
鶯をひねもす友に山路かな
故郷や雪形の猿生まれをり
初蟬や講師も窓に目を向けぬ
騎馬戦の女大将風薫る
捕まりてはや鎌かざす子蟪蛄
連獅子の子役の見得や灯の涼し
機関車の蒸気花野に影おとし
帆船に波照り返す良夜かな
奥飛驒のランプの宿や十三夜

膝栗毛

岡野里子

山 峡 を つ な ぐ 鉄 橋 鰯 雲
空 の 青 極 ま り 秋 の き り ん 草
秋 天 へ 近 づ く 峠 膝 栗 毛
つ ま づ き て 色 無 き 風 と 思 ひ け り
朱 の 群 れ に 一 本 白 し 曼 珠 沙 華
穂 芒 や 風 の 磨 け る 露 坐 地 蔵
旧 街 道 名 残 り の 松 の 色 変 へ ず
判 読 の 難 き 高 札 新 松 子
捨 石 の 苔 の 滑 ら か 露 微 塵
爽 籟 や 勇 み て 結 ぶ 靴 の ひ も

年間優秀賞（平成二十三年）

乙矢集

優秀賞

空睨む達磨や迫るどんどの火

菅野 蒔子

青炎集

優秀賞

古里や秋を炊き込む自在鍋

稲垣 佳子

耕土集

優秀賞

綾取りの川よ橋よとちやんちやんこ

細島 孝子

◆特別作品年間優秀賞作品（平成二十三年）

優秀賞

鵜飼船

有賀鈴乃

磯蟹の指先ほどや潮溜り
鵜篝を待ちて五十余屋形船
鵜舟待ち灯を落したり屋形舟
棹させる古老反り身の鵜舟か
鵜匠引く縄の長短乱れなし
ほうほうと鵜匠の声や火の弾け
高嶺星鵜飼の宴の果てにけり
川端に昨夜の名残りや鵜飼舟
今朝の秋日の出の綺羅を長良川
国盗りの城の天守や秋立てり